

挨拶とは、

相手の人間性を

引き出す「祈りの言葉」

だった

例年『大黒祭』には大勢の方々がお見えになるのですが、今年も本当に多数の参詣者が来られた事に感激しました。そんな中、久しぶりに真成寺でのご法話をさせて頂き、大変嬉しく、そして緊張しました(苦笑)。

というのも、毎月この『人生ハンド仏句』にて私の拙い気持ちや、根こそぎ皆様の元へ届けさせて頂いているので、ご法話にて改めて何かのお話しをお届けするという事で、ご法話の内容に本当に頭を悩ませて臨ませて頂いたからです。そして話の内容ががちよつと内面的なものになったので皆様の反応が気になっていたのですが、有り難い事に沢山の賛辞を頂戴し、少しホッとしています。たとえこれが上手で仰って下さっていたとしても、素直に受け止めようと思っと思っています(笑)。

あの話の中で私は、**人間教育の基盤**

は家庭教育にある。その家庭教育の根本は「躰」にある。つまり「躰」こそ人間形成の基盤である。その「躰」の中でもとりわけ、『挨拶』というものが親も、子も人間として重要な姿勢であり教育であると申し上げました。

ここで『挨拶』の由来について、少しご説明させて頂きます。

もともと『挨拶』というのは仏教用語で、『一挨拶(いちあいいつさつ)』というのが本来の言葉でした。『挨拶』とは押す。『拶』とは決まるという意味があります。挨拶というのは、相手の心に切り込んでいくという意味なのです。

禅問答をする時に、師匠になる人は弟子に向かって力を量ってみる。これが挨拶の始まりだったのです。聞く弟子にしてみれば、師匠の教えの中から仏教の悟りを引き出そうとする。そういう**命と命のやり取りが本来の『挨拶』**という言葉だったのですね。今日では挨拶は儀礼的なものになってしまいました。儀礼的にやるならまだしも、**家族の中で「おはよう」も言わない家庭が増えて来ました。**挨拶が欠けてきた事によって、人間関係が冷ややかになってきたように思います。そこに悲しい殺人事件なんかエスカレートしていったのではないかと思います。「お

はよう・いつてきます・ただいま」という挨拶の中に、何かを込めて相手に訴えていきたい。挨拶を交わすことによって、相手の本当の人間性を引き出していこうという、『祈りの言葉だった』のです。

ちなみに「ありがとう」は、「有ること難し」です。当たり前な事は何一つありません。そんな当たり前ではない事に気がつき、その事に感謝の気持ちを表すのが『有り難う』という言葉なのですね。自分から「ありがとう」を言うように、他人様から「ありがとう」を言われる様な生き方を目指したいものですね。

『大黒祭』でのご聴聞、また紙面を讀んでくださった皆様、本当に有り難うございました。

さて今月号も『日本の歴史や素晴らしさ』について、お話しを進めて行こうと思います。

現代では海外旅行も珍しくなくなつてまいりました。むしろ「国内旅行するくらいなら、海外の方が安くて気分転換になる」という声も聞かえてきます。そのくらい外国が近くなりまし。そんな中で、海外から見た日本人の特性や、日本人の評価をご紹介します。うと思ひます。

まず世界最大級のオンライン旅行会

社のエクスペディアという会社があるのですが、平成二十一年に、各国観光客の国別の評価を調査し、その結果を発表されました。それによると、「ベストツーリスト(最良の観光客)」に選定されたのが日本人でした。しかも三年連続一位なのだそうです。調査は欧州、アメリカ、アジア太平洋の地域別で集計され、日本人は全ての地域で一位に評価されたのです。更に日本人は「行儀の良さ(その国の文化を大切にし、一般的なエチケットを守る)・礼儀正しい・部屋を綺麗に使う・騒がしくない・不平が少ない」の項目において一位に選ばれた他、ほぼ全ての項目で上位に入っています。その総合評価において日本人は百点中、七十一点を獲得し、二位の英国人(五十二点)、三位のドイツ人(五十一点)を大きく引き離しての一位評価だったのです。今のところ日本人は「マナーを守る最良の観光客」として不動の地位を築いているのです。また「日本は世界で一番人気がある国」といっても差し支えないという評価もあるのです。日本が他国から人気がある理由の一つに、**日本に敵対する国が少ないことも重要な要素**となります。対して米国は、世界から慕

われていると同時に、多くの国と敵対しています。イギリス BBC の平成十八年の調査で、イラクと共に最下位に評価されています。一方、日本は欧米はもとよりアラブ諸国とも有効な関係を築いていて、北朝鮮など一部の国を除いて、日本に敵対する国家は存在しないのです。

昨今は、中国や韓国などから日本政府が言われ無きバッシングを受けていますが、そのほとんどが虚像の出来事ばかりで、頭を下げる筋合いもないのに、近年の政府の弱腰姿勢には、目も当てられない状態です。しかしその政府を支持しているのが私達国民です。現在の日本政府を作り出しているのは、私達民間人一人一人の意思の表れという事になりましょう。私達は日本人としての誇りを胸に、自立的した精神を築く事で、日本国の未来は明るく輝くはずですよ。そんな希望を持てるお話しが日本には沢山あるのです。

今月号最後に、私達日本人の祖先達は、どんな状況におかれても決して手抜きをしない、誇り高き民族だったという事例を一つご紹介して結びに代えます。

【強制労働でも手抜きをしない日本の先人達】

大東亜戦争末期の事です。外地にいた約六十五万人の日本人がソ連に強制連行され、強制労働をさせられた「シベリア抑留」の中で、抑留者が中央アジアまで連行されていたことはあまり知られていないようです。ウズベキスタンは中央アジアに位置する旧ソビエト連邦の共和国で、首都はタシュケント。そのタシュケントに中央アジア最大のオペラ・バレエ劇場「ナヴォイ劇場」があります。劇場はおよそ二年の工事を経て昭和二十二（一九四七）年に完成した千五百人を収容できる煉瓦造り三階建ての劇場です。この建設工事を担当したのはシベリアに抑留され強制労働をさせられた日本人だったそうです。ウズベキスタンに連行された約二万五千人の抑留者達は、過酷な労働を強いられ、道路・工場・運河・炭鉱・発電所、学校などの社会基盤の建設にあたった。厳しい気候条件、十分な食事を与えられない厳しい収容生活、そして就労させられた危険な仕事などの結果、病気や事故などで八一二人の日本人抑留者が命を落としたりと言います。しかしそんな理不尽かつ非人道的な状況の中でも、手抜き一つする事なく、入り口の天上付近には細かい

彫刻や模様があしらわれているが、それらは手先が器用で細かい作業を得意とする日本人の抑留技術者が制作したもののようです。そんな日本人の丁寧で真面目に働く姿を目の当たりにした市民達は、尊敬と畏敬の念を抱き、見るに見かねて食料を差し入れた者もいたというから驚きです。それだけではありません。一九六六年四月、タシュケントを震源とする大地震が起き、市内では震度八を記録し、建物のおよそ三分の二が倒壊しました。ところが当時築十八年を迎えたナヴォイ劇場は、全くの無傷で、見渡す限り瓦礫の山中で、凜と輝いていたといえます。これを見たタシュケントの市民は、完成度の高い仕事を成し遂げた日本人抑留者達の事を改めて称えました。中央アジアの中でもウズベキスタンの親日の度合いが抜きん出ているのは、抑留者達のおかげなのかもしれません。ソ連邦崩壊後の一九九六年、独立したウズベキスタンのカリモフ大統領は、ナヴォイ劇場に日本人抑留者の功績を称えたプレートを掲げました。そこには「一九四五年から四六年にかけて極東から強制移住させられた数百人の日本人がこの劇場の建設に参加し、その完成に貢献した」とウズベク語、日本語、英語で書かれています。

冒頭に記しましたが、日本は『躰』を核にした家庭教育が、他国と比べると決定的な役割を果たしています。異邦人は口を揃えて言います：「日本の子供ほど行儀が良くて親切な子供はいないし、日本人の母親ほど辛抱強く愛情に富み、子供に尽くす母親はいない（無償の愛情）。そして父親は黙して多くを語らず、仁徳のある大きな背中で語り、子供達を先導していく」と。これが異邦人から見た日本人の正当な評価なのです。私達は日本人であることに誇りを持ち、子孫達が畏敬の念を抱くような生き様を示さなければいけないと思うわけでございます。

副住職 谷川寛敬
合掌

